



## みどころ

映画のタイトルはわかりやすい方がベター！その意味では、「ホールドオーバース」＝「居残り組」という英語すら理解できない日本人に、本作は不利だ。しかし、『置いてけぼりのホリディ』とサブタイトルをつけたら・・・。

嫌われ者の中年教師と、名門校で寮生活を営む出来の悪い生徒(クソガキ?)に、ベトナム戦争で一人息子を失い、悲しみに打ちひしがれている料理長の女を加えた3人の主人公たちの「ホールドオーバース」は、如何に？

そんな物語の一体ナニが面白いの？と突っ込まれそうだが、意外や意外。アレクサンダー・ペイン監督と名優ポール・ジアマッティの『サイドウェイ』(04年)以来、10年ぶりのタッグによる本作は最高！チラシに書かれている「孤独な魂が寄り添い合う・・・」「ほろ苦く、あたたかな、良質ドラマの新たな金字塔が誕生！」が誇張でないことが、後半からクライマックスにかけて解き明かされてくる。各自が持っていた“ある秘密”を知っていく中で、それをしっかり噛みしめたい。こりゃグッド！こりゃ感動作！

## ■知らなかったナァ、第96回アカデミーで助演女優賞！■

第96回アカデミー賞は、『オッペンハイマー』(23年)『シネマ55』18頁)が作品賞を含む最多7部門を受賞して話題を独占した。そのため、2024年3月時点で日本公開されていなかった本作は全然認知されていなかった。『キネマ旬報』3月号のアカデミー賞予想でも、本作は作品賞のほか、ポール・ハナム役を演じたポール・ジアマッティが主演男優賞に、メアリー・ラム役を演じたダヴァイン・ジョイ・ランドルフが助演女優賞に、アレクサンダー・ペイン監督から委ねられて脚本を書いたデヴィッド・ヘミングソンが脚本賞(オリジナル)にノミネートされていたが、そもそも『ホールドオーバース』(仮題)とされて

いたほどだ。

私はアレクサンダー・ペイン監督の名前を、『サイドウェイ』(04年)、『シネマ 7』212頁)で頭に刻み込んだ。その理由は第1に、カリフォルニアの葡萄醸造所(ワイナリー)にワインツアーに出かけた2人の中年男を主人公とした同作のマスコミ先行試写会では、何と紙コップに入ったワインサービスをしてくれたため。第2に、本作が意外にも、今どきのハリウッド映画には珍しく地味な作品ながら、アカデミー賞4部門にノミネートされ、中途半端な中年男と中途半端な中年女だって幸せになれることをじっくり教えてくれる名作だったためだ。同作で主演したポール・ジアマッティは地味で中途半端な中年男の代表のような俳優(?)だが、その演技力は抜群だった。

本作は、そんな『サイドウェイ』でタッグを組んだアレクサンダー・ペイン監督と俳優ポール・ジアマッティが10年ぶりに再度タッグを組んだ作品だから、こりゃ必見!しかし、『キネマ旬報』3月号の出版時ですらまだ邦題が決まらず、やっと『ホールドオーバーズ 置いてけぼりのホリディ』と決定した本作の邦題は、こりゃ一体ナニ?

## ■□■バートン校?クリスマス休暇?ホールドオーバーズ?■□■

日本にも中国にも名門校と呼ばれる大学がある。それは、イギリスでもアメリカでも同じ。中国では北京大学や清華大学、イギリスではオックスフォードやケンブリッジ、アメリカではハーバードやスタンフォードが名門大学だが、アメリカ北東部のマサチューセッツ州のボストン近郊には、名門バートン校があるらしい。私が中学・高校時代を過ごした松山の愛光学園も、男子ばかりの6年制の進学校で、「愛と光の使徒たること」を目指す名門高校だが、数多くのエリートを輩出しているバートン校が目指すものも同じだろう。愛光学園では、私のような松山市内の生徒は自転車通学だったが、県外から大量の寮生を受け入れていたから、寮生たちの勉強と生活は相当大変だったようだ。

あくまで架空の設定だが、バートン校のような名門高校の寮生活の厳しさと楽しさは私にはよくわかる。しかし、邦題の「ホールドオーバーズ」って一体ナニ?それは「居残り組」のことだが、そんな英語を知っている日本人はまずいないだろう。そのため、本作はギリギリまで「仮題」とされ、最終的な邦題には『置いてけぼりのホリディ』というサブタイトルが付けられたようだ。日本は1960年代から高度経済成長を続けたが、その時代の日本人は「働きバチ」で、週休2日制など考えられないものだった。大手銀行の正月休みは12月31日と1月1日、2日だけだったし、井沢八郎が歌った『あゝ上野駅』(64年)に代表される昭和歌謡でも、お正月の帰省はせいぜい1、2日だった。しかし、お正月以上にクリスマス(休暇)を重視するアメリカでは、全寮制のバートン校においても、先生はもとより、寮生たちも全員家族とともにクリスマスを過ごすのが常識らしい。したがって、クリスマス休暇にもかかわらず、家族の元に帰らず学校に居残る人のことを「ホールドオーバーズ」というわけだ。なるほど、なるほど・・・。

ちなみに「置いてけぼりのホリディ」は、そんな「ホールドオーバーズ」という、英語

を理解できない日本人のためにあえて付けられた副題だが、そう考えると、パートン校内で「置いてけぼりのホリディ」を過ごすことになった数人の男女たちの悲しみはいかばかり・・・。

## ■□■タイトルに注目！この英語わかる？この邦題はナニ？■□■

私が本作のことを全然気にかけていなかった理由の1つは、そのタイトル（のわかりにくさ）にある。つまり、まずは、本作のメインタイトルとされている「ホールドオーバーズ」という英語の意味がわからないためだ。チラシには「名門パートン校の生徒たちは、誰もが家族の待つ家に帰り、クリスマスと新年を過ごす。しかし、留まらざるを得ない者もいた。」と書いているから、これを読めば、本作は3人の主人公たちが名門パートン校のクリスマス休暇で「居残り組」とされたところから生まれる、心温まる物語だということが少し見えてくる。しかし、私の英語力では「ホールドオーバーズ」はわからない。ちなみに、読売新聞オンライン編集委員恩田泰子氏の映画評『映画「ホールドオーバーズ 置いてけぼりのホリディ」…感動を押しつけない本物の感動作』によると、「タイトルに使われている「ホールドオーバー」という英語の日本語訳として、大抵の辞書が載せているのは「残留者、残留物」という言葉。」らしいが、原題のように、いきなりそれをタイトルとされたのでは、ほとんどの日本人はその英語についていけないから、それだけで「興味なし」となってしまうはずだ。そう考えると、「置いてけぼりのホリディ」というサブタイトルをつけた（考えた）人はえらい。「ホールドオーバーズ」＝“居残り組”と理解をした上で、「置いてけぼりのホリディ」という邦題を見れば、「こりゃ面白そう！」と多くの日本人が考えるだろう。

## ■□■3人の居残り組のキャラは？その相性は最悪だが・・・■□■

本作は、古代史の教師ポール・ハナムが校長に呼び出され、事情があつて家に帰れない5名の生徒たちの「安全と健康管理」を命じられるところからスタートする。このシークエンスでは、「生徒に対し、人間的に振る舞え」と釘を刺されるところが最初のミソ。校長がそんな釘を刺したのは、融通の効かないハナムが、生徒のみならず他の教師たちからも嫌われていたためだ。

当初、居残り組とされた生徒は5人だったから、ハナムによるクリスマス休暇中の「安全と健康管理」はその5人に対して開始したが、“ある事情”によって、そのうちの4人は“お迎え”がやってきたため、最終的に“居残り組”になったのは、「母親が再婚した夫と急遽新婚旅行に行くことになった」ため、学校に残ることになった生徒アンガス・タリー（ドミニク・セッサ）だけだ。他方、ベトナム戦争で一人息子カーティスを亡くしたばかりの料理長のメアリー・ラム（ダヴァイン・ジョイ・ランドルフ）も、どこにも行くところがないため、ハナムと共に学校に留まることに。

本作導入部では、クリスマス休暇を迎えようとするパートン校におけるそんな“ドタバタ劇”が淡々と描かれるが、そこに見る人物像と家族のあり方は興味深い。何よりも、『サ

イドウェイ』でさまざまな賞を受賞した俳優ポール・ジアマッティの、融通の利かない嫌われ教師役がお見事だ。さらに、本作で第96回アカデミー助演女優賞をゲットした女優ダヴァイン・ジョイ・ランドルフの、教師側でもなければ生徒側でもない、単なる雇われ人としての立場でありながら、ハナムとアンガスの人生に大きな影響を与える演技も素晴らしい。

そして、圧倒的に驚いたのはアンガス役を演じた新星ドミニク・セッサの新鮮さだ。私は中学3年生頃に新星の如く登場した俳優ジェームズ・ディーン主演の『エデンの東』(55年)に衝撃を受け、続く『理由なき反抗』(55年)も、『ジャイアンツ』(56年)も見たが、本作におけるドミニク・セッサの登場は、約70年前のジェームズ・ディーンの登場と同じような新鮮さと衝撃だった。本作導入部に見るアンガスは、再婚した母親から迎えに来れないことを伝えられると、必死で「ママ、僕を一人にしないで」と懇願する情けない高校生だし、授業風景や寮生活風景における彼の言動は憎たらしいものばかりだから、はっきり言って、とても嫌な奴！これでは、いくらメアリーが側にいても、いずれアンガスはハナムと対立し、下手すると停学、退学処分に・・・？そんな最悪のキャラが教師 vs 生徒としてぶつかり合うバートン校の今年のクリスマス休暇の「ホールドオーバーズ」は最悪！私はそんな予想をしていたが・・・。

## ■居残り組の行動は？ハチャメチャな中にも一種の絆が！■

それぞれの“ワケあり事情”のために「ホールドオーバーズ」＝“居残り組”になってしまった3人の行動を見ていると、あくまで“静のメアリー”に対して“動の2人”の行動、とりわけ不満いっぱいかつエネルギーいっぱいの生徒アンガスの行動は、ハチャメチャだ。その第1は、どうしても学校から出たいため、アンガスが内緒で街のホテルを予約しようと電話しているところをハナムに見咎められ、学校中を逃げ回った挙句、立ち入り禁止とされていた体育館に逃げ込み大暴れたため肩を脱臼してしまったこと。怪我のことでアンガスの親からクレームが入り、自分はクビだと嘆くハナムだったが、アンガスは病院に対してハナムを父だと言い、「母と離婚した父に無断で会いに行ったから内緒にしてくれ」と母親へは連絡せずに済むように取り計らってくれたから、そんなアンガスの大人びた対応にビックリ。

第2に、病院の帰りに立ち寄ったダイナーで、偶然にも学校で事務職として働くクレイン（キャリー・プレストン）に会い、彼女の家のカリスマパーティーへ誘われたため、思い切って3人で参加したこと。パーティーで、アンガスは若い娘と打ち解け、ハナムも意外にもクレインと親しげに話し込んだが、突然メアリーが泣き出してしまったから、アレ・・・。いつも気丈に振る舞うメアリーだったが、彼女の心の中は亡くなった息子への思いに打ちひしがれていたわけだ。そんな風に「ホールドオーバー」中の出来事が続いていくと、次第に3人の心の中には互いを思いやる気持ちが芽生え始めることに・・・。

さらに第3は、テーブルにメアリーお手製の家庭的な料理が並んだクリスマスの夜、「ボ

ストンへ行きたい。スケートしたり、本物のツリーが見たい」と突然と言い始めたアンガスに、当初は反対していたハナムだったが、メアリーに説得されて一緒に行くことになったから、アレレ、これは「安全と健康管理」を命じられたハナムの「越権行為」だが、そこは“社会見学”とでも誤魔化しておけば何とでも・・・そんな軽い気持ち(?)で、妊娠中の妹に会いに行くメアリーも一緒に、翌朝 3 人は車に乗ってボストンに向けて、いざ出発!

## ■□■人間は誰にでも“言えない秘密”が! だからこそ・・・■□■

本作のチラシには「孤独な魂が寄り添い合う・・・」「ほろ苦く、あたたかな、良質ドラマの新たな金字塔が誕生!」と書かれている。さらに、「魅力的かつ感動的」「最高傑作 映画の魔法に掛けられる」「心温まる 時代を超える物語」とも書かれているが、それは一体なぜ?

本作導入部におけるアンガスの問題児ぶりを見ていても、嫌われ者教師ハナムの言動を見ていても、こんなひねくれ者はどこにでもいるし、こんなひねくれ者が「ホールドオーバーズ」=「居残り組」になるのは当然。したがって、「ホールドオーバーズ」とされてしまったひねくれ者の教師と生徒を主人公にした映画なんて、くだらないだけ。さらに、それに輪をかけて、一人息子を失い、心の痛みに打ちひしがれている女を加えた 3 人組の物語なんて、鬱陶しいだけ。誰でもそう思うのは当然だ。ところが、ボストンでさまざまな社会見学(?)を済ませた(楽しんだ?)後、さらにアンガスが悪童ぶりを発揮して、ハナムを撒き、一人でタクシーに乗って逃げ出そうとしたから、アレレ、アレレ・・・辛うじてタクシーに乗り込んだアンガスを発見し、「このまま行けば、退学だぞ」と叫ぶハナムに対して、アンガスは真剣な顔で、「逃げ出すわけじゃない。一緒でもいいからタクシーに乗って。」と言うため、ハナムもタクシーに乗り込んだが、さて、アンガスが向かった先は・・・?

本作導入部では、息子と過ごすクリスマスよりも、再婚した男との新婚旅行を優先させる母親に泣きつく、情けない高校生のように思えたアンガスだが、実はボストンでアンガスが行きたかった場所は、今は重度の認知症と診断され、施設に入れられている実の父親のところだった。こんな展開の中で、アンガスがそれまで決して見せなかった、父親との“言えない秘密”をハナムに見せつけると、今度は「人間は嘘についてはダメだ。」とカッコいいことばかりを語っていたハナムの方にも、ある重大な“言えない秘密”があることがアンガスの前で露呈されてしまったから、アレレ、アレレ・・・。なるほど、人間は誰にでも“言えない秘密”があるものだ、ということをあらためて痛感することに。

てなわけで、いろいろなことがありながらの「ホールドオーバーズ」3 人組のクリスマス休暇とボストンへの旅は終了したが、学校が始まると、校長に呼び出されたハナムの前には、おかんむりの表情いっぱいアンガスの両親が! さあこの 2 人は、校長に何の文句を言うために、ここに座っているの?

## ■□■感動はじわじわと！こりゃ名作！この記事にも納得！■□■

世の中には一見とっ付きにくいって、ちょっと付き合うだけで「嫌な奴！」と思ってしまふ奴も多い。若く、純真な心を持っているうちはまだ少ないが、中年から老人になり、人の心の表と裏が見えてくると、とりわけ、そんな風に思える奴が多いことに気づかされてしまう。そして、その逆が少ないのも、残念ながら現実だ。

ところが本作を見ていると、当初「嫌な奴！」と思い込んでいたクソガキのアンガスも、嫌われ教師のハナムも、実はそんな表面ヅラとは違う本質を備えていることが少しずつ見えてくる。とりわけ、本作ラストに見る、校長とアンガスの両親を前にしたハナムの発言は、お見事としか言いようがないので、それに注目！

クリスマス休暇で「ホールドオーバーズ」＝“居残り組”とされ、校長から「安全と健康管理」を命じられたはずのハナムが、アンガスとメアリーと一緒にボストン行きを強行したのは、いくら「社会見学」と言いつくろっても、自らの任務違反であることは認めざるを得ないだろう。しかし、上からの命令なら何でも盲目的に従えばいい、というものではないはずだ。昔から少し反抗的な性格を持った私は、常にそう考えているから、そこでハナムが「ボストンに行ったのはアンガスの意思ではなく、自分が言い出したことだ。」と主張したからすごい。これによって、本来退学処分になるべきアンガスがそうならず、それに代わってハナムが退職処分になってしまったのは仕方ないが、そのことにハナムが十分納得しているところが素晴らしい。本作については、前記恩田泰子氏の「感動を押し付けない本物の感動作」というタイトルに私は全面的に同意したい。

2024（令和6）年7月4日記